

## 羽村市史『近現代編』編集の視点

- ①資料編（図録編・文字資料編）の構成は、時系列にこだわらず、テーマ性も重視する
- ②本編（通史）では、戦前と戦後の連続性と不連続点を明確にし、単なる行政史としない
- ③羽村の歴史的特徴を明瞭化する（キーワードの明確化）  
 河岸段丘地形の影響、多摩川との関係、畑作・養蚕・養豚業の展開、青梅鉄道の敷設、横田基地との関連性、首都圏整備法との関係性、区画整理事業の展開、工場の誘致…etc.  
 トピックテーマ:玉川上水、中里介山、消費生活運動…etc.
- ④地域の歴史を日本の歴史と関連づけながら検討する
- ⑤歴史学にとどまらず、地理学・政治学・経済学・社会学・文学等の視点も取り込む
- ⑥図録編では、写真以外に絵図、地図、絵葉書、ポスター、チラシ類も資料とする

## 『羽村市史 資料編 近現代図録』掲載候補項目（テーマ別キーワード）

- I 地形環境と景観 [羽村のいま・むかし]  
 地形図・土地利用図、航空写真、景観写真、地名変化に見るまちの移り変わり 等
- II 多摩川と台地 [台地のまち・羽村]  
 多摩川、多摩川護岸工事、玉川上水、湧水、水車、段丘崖、武蔵野台地、雑木林、畑作、農作業、農業技術、農作物被害、養豚、酪農、養蚕業、蚕種製造、組合製糸、産業組合、醤油製造 等
- III 教育と文化 [進取のまち・羽村]  
 自由民権運動、学校教育、中里介山、地域の祭り、公共施設整備（公民館、福祉会館、スポーツセンター、コミュニティーセンター、郷土博物館、図書館、スイミングセンター、リサイクルセンター、高齢者サービスセンター、福祉センター、在宅介護支援センター、子ども家庭支援センター、生涯学習センター）、消費者生活運動、国際交流、東京オリンピック、スポーツ活動、高齢者福祉 等
- IV 市街地開発と都市化 [変貌するまち・羽村]  
 市街地開発、都市計画、道路整備、下水道整備、青梅線、バス交通、交通問題、砂利穴問題、羽村駅東口・西口整備、土地区画整理（青梅・羽村地区、小作台地区、神明台・富士見平地区）、日野自動車、西東京工業団地、商業施設 等
- V 暮らしの変化 [くらしのまち・羽村]  
 忠魂碑、青年団活動、消防団、出征、勤労奉仕、学童疎開、戦時生活、軍需工場、終戦、横田基地、アメリカンスクール、高射砲陣地、町制、農協、有線放送、電話交換、生活改善、青年会・婦人会活動、動物園、通勤・通学、市制施行、住宅団地、自治会活動、コミュニティーバス、商店、商店会 等

合計 約 300 ページ

# 農業の変化

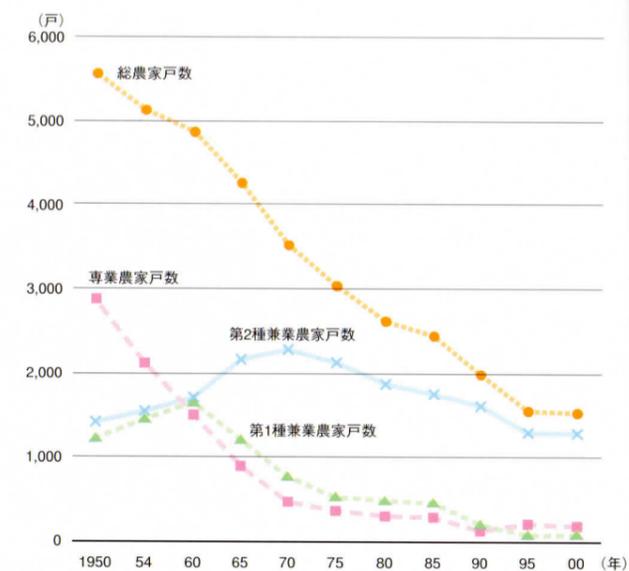
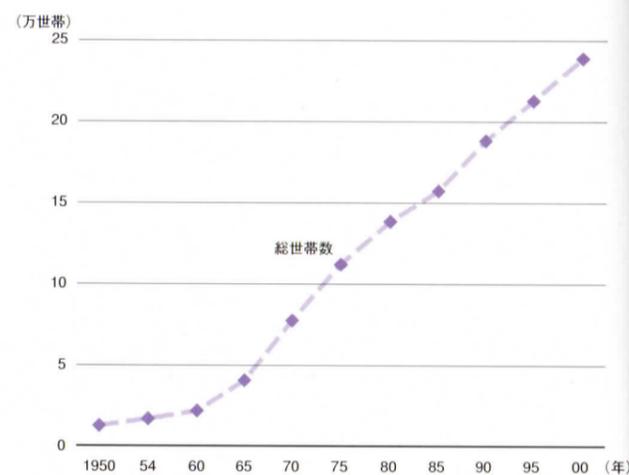
戦後の激しい都市化の中で、相模原市の農業経営は大きく変化してきた。市制施行以前の1950(昭和25)年当時、農家数は約5,500戸で総世帯数の約40%を占め、専業農家も約3,000戸を数えた。しかし、工業化・住宅地化が進む中で農家数は年々減少し、2000(平成12)年には1,600戸を切り、総世帯数に対する割合は1%にも満たなくなり、専業農家に至っては、わずかに150戸ほどを数えるにとどまっている。

農地も、1954(昭和29)年当時は4,000haを超えていたが、2000(平成12)年には700haを切っている。農業生産物については、かつては養蚕業や、麦類・陸稲を中心とする穀類、甘藷(サツマイモ)・馬鈴薯(ジャガイモ)を中心とする芋類などが主であったが、近郊農業の進展に伴うハウス栽培の増加とともに、野菜類・花き類や果樹類の生産に主力が移行していった。このほか、市の特産品として知られるヤマトイモは、「\*かながわの名産100選」にも選ばれている。

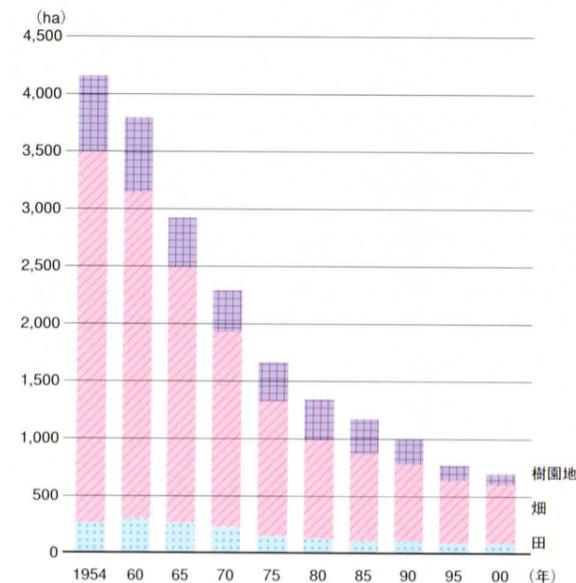
また相模原では、戦前から「高座豚」で知られる養豚が行われていたが、それに加えて戦後は酪農や養鶏も盛んに行われ、近郊農業の一翼を担った。



[96-1] 畑の風景 大島 1964(昭和39)年  
上大島から津久井郡の城山方面を望む。かつては畑の周囲に桑の木が植えられ、地元ではこれを「マワリックワ」と呼んだ。



[96-2] 総世帯数と農家戸数の推移  
〔『世界農林業センサス』『農業センサス』より作成〕



[97-1] 経営耕地面積の推移  
〔『世界農林業センサス』『農業センサス』より作成〕



[97-2] 畑に押し迫る団地 大島 1976(昭和51)年  
1970年代後半になると、大沢地区や田名地区も住宅地化が進んだ。後方に見えるのは、県営・市営大島団地である。



[97-3] 市街化区域内の農地 上鶴間 1973(昭和48)年  
市街地化の波は小田急沿線から押し寄せた。農業も変質し、ハウス栽培等の近郊農業が盛んになった。

## ワンポイント

かながわの名産100選：1985(昭和60)年度選定。神奈川県内の風土と伝統に培われた物産の中から100品目を選んだもの。地域に根ざした産業の興隆と、地域の人々のふるさと意識を高揚し、個性ある地域生活圏の形成や地域文化の創造を図ることを目的とした。

## 農業の変化

# 盛んだった養蚕

水田に乏しく、米の収穫が極めて少なかった相模原では、江戸時代以降、養蚕が盛んに行われた。ことに明治以降は、農家の大きな収入源となった。養蚕の隆盛は、農家の建築構造にも影響を与え、中二階を設けたり、養蚕専用の蚕室さんしつが建てられたりした。収穫された繭まゆは各農家で生糸にし、さらに、その糸をもとに機織りも行われた。

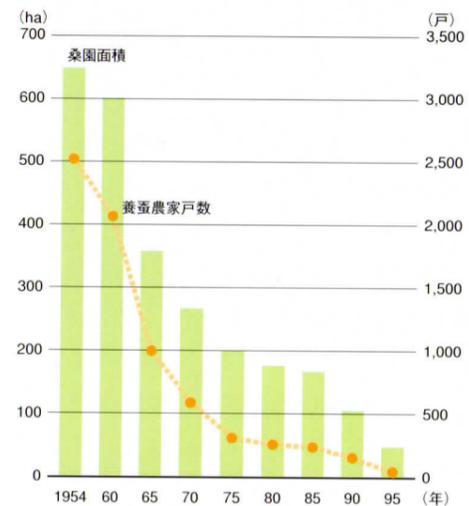
1954(昭和29)年には、市域の桑園面積は600haを超え、養蚕農家も2,500戸を数え、神奈川県下の3分の1を占める繭の生産量を誇ったが、都市化の進行とともに桑園や養蚕農家は急速に減少していった。



[100-1] 桑園風景 東大沼 1983(昭和58)年  
養蚕を専業とする農家では、広い桑畑を作り、毎日桑摘みを行った。昭和期には、「\*改良ネズミ返し」などの品種が栽培された。

### ワンポイント

改良ネズミ返し：熊本県原産の桑の一種で、1907(明治40)年ごろ育成され全国で栽培された。相模原では戦後広く植栽された品種。葉がギザギザしている様子から、この名が付けられたという。



[101-1] 桑園面積と養蚕農家戸数の推移  
(『世界農林業センサス』『農業センサス』より作成)



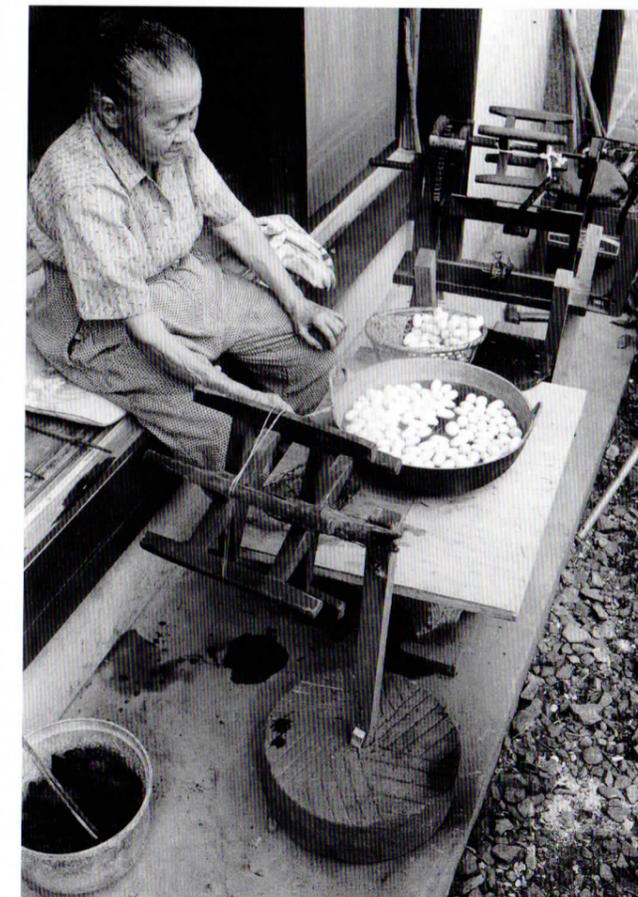
[101-2] 養蚕農家 大沼 1983(昭和58)年  
養蚕型民家の特徴を備えた、1928(昭和3)年建築の\*入母屋(いりもや)造の農家。最盛時には、すべての部屋で蚕を飼った。



[101-3] \*蚕影(こかげ)神社 上溝 1970年代  
蚕神を祭った神社で、養蚕の豊蚕を願い盛んに信仰された。蚕は「オコサマ」と呼ばれ、大事にされた。



[101-4] 蚕の飼育 1983(昭和58)年  
1950年代後半から、養蚕機械の電動化や蚕室の設置などが進み、飼育の方法や道具も近代化が進んだ。



[101-5] 糸取りの様子 1986(昭和61)年  
蚕が作った繭は、生糸にして売った方が高い収入が得られたため、農家では盛んに糸取りを行った。

### ワンポイント

入母屋造：上部が2方向、下部は4方向へ勾(こう)配を有する屋根をもつ建築の様式。法隆寺金堂の屋根はこの様式である。  
蚕影神社：茨城県つくば市に本社があり、南関東甲信地方に信仰圏をもつ。市内各地にも蚕神をまつた祠(ほくら)などがあり、コカゲサンなどと呼ばれている。

## 平成 28 年度羽村市史関連講座について

- 1 目的 ① 郷土羽村をよりよく知るための機会とする  
② 羽村市民に広く市史編さん事業を周知する  
③ 調査過程で得られた知見を、羽村市民に還元する
- 2 日時 平成 28 年 11 月 26 日（土） 14:00～16:00
- 3 場所 羽村市生涯学習センターゆとろぎ 講座室 1
- 4 内容 「山と川と坂と ～羽村市とその周辺の大地の営み～」  
青梅駅周辺からお茶の水駅周辺まで広がる武蔵野台地。羽村市はその武蔵野台地の中でも上流、ほぼ西端に位置しており、古くから多摩川の影響を強く受けてきました。講師が 2 年前から市史編さん事業に参加して羽村市内の坂や崖を調べた結果を紹介し、羽村市の地形を特徴づける羽村市西部の坂や山が川の作用と関わってどのようにできたのか、その大地の営みについて話をします。
- 5 講師 白井正明氏（羽村市史編さん部会第 4 部会長/首都大学東京地理学教室准教授）
- 6 対象 一般（羽村市民等を問わない）
- 7 定員 80 人（事前申し込みなし）（保育あり 定員 8 人）  
※保育については、事前申し込みあり
- 8 参加費 無料
- 9 広報 「広報はむら」 11/1 号・公式ウェブサイト・「伸びゆくはむら」・チラシ・ポスター